

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Apr. 30th, 1960, No. 338.

通卷三三八号

# 關西大學學報

昭和35年4月 第338号



桜 咲 く (千里山)

關西大學出版部

# ロートエル・ラガツ博士講演会

加藤 一朗

文学部助教授

昨年十二月十九日オハイオ大学教授ローエル・ラガツ博士 Dr. Lowell Ragatz をむかえ、文学部主催のもとに千里山第一学舎第一会議室において歴史学講演会をひらいた。教授はフルブライト交換教授として来朝、一年にわたり主に慶応大学、学習院大学において講義し、昨夏京都におけるアメリカン・セミナーの講師ともなつた。教授は近代帝国主義 (Modern Imperialism) を専門とする有数の歴史家で、ヨーロッパ列強とヨーロッパ的制度との世界的拡張、植民地的民族主義等の問題に関する著作が多いが、特に英領西インド諸島の歴史に造詣が深く、イギリス植民地帝国内におけるこの地域の重要性を強調する点がユニークな史風をなし、その "The Decline of the Planter Class in the British Caribbean, 1928," によつてジャスティン・ウィンザー賞 Justine Winsor Prize を授与されている。この目おなじくフルブライト交換教授であるラガツ夫人も「アメリカ民主主義の動き」と題して講演される予定であつたが、令息が不慮の事故にあわれたため、来学されなかつた。次にラガツ博士の講演内容を略記する (以下文責筆著)

〔演題〕 重商主義と北アメリカ十三植民地

〔要旨〕 アメリカ合衆国建国以来一世代前の時代までは、合衆国独立革命の原因をイギリス重商主義 (植

民地政策) の圧制とこれにたいする植民地側の反撥に  
おいていた。すな  
わち、一貫して当  
時のイギリス本国  
を暴君としアメリ

カをその犠牲とする見方が支配的であり、アメリカ国民は永く伝統的な「反英感情」の中におかれていた。この感情は著しく教育—小学校から大学に至るまで—にも影響を及ぼし、高等学校の教科書などは二十世紀に入つてもなおこの種の感情にみだされて居り、私 (ラガツ氏) などもこのような「悪しき教育」の犠牲となつて、まづ反英主義者として育てられた一人である。祖父母の語つてくれた物語もこの思潮にしたがつていた。これはもつぱら独立革命に精神的な、又人格的 (パーソナル) な解釈を下していたためであつて、学界における定説も「独立のエネルギー源は愛国的な感情であつた」としていた。

このような伝統的な反英思想、愛国的な国民感情には、二十世紀初め歴史学の発達によつて一大転機がもたらされた。いわゆる科学的歴史学派 (サイアンティフィック・スクール) の誕生の結果である。この派はイギリス植民地政策に関する浩瀚な三部作を公にした。『ピアアをはじめとして、イリノイ大学のグリーン、イエール大学のバーン、ペンシルヴァニア大学のエイム、プリンストン大学のベーカー等によつて代表される。すでにその派の中にも種々の異つた傾向は認められるが、共通の傾向としていずれもが、独立革命に関する従来の主観的な立場を克服し、イギリス、アメリカ両国に残つている史料を客観的に操作して独立の

真相を究明すべく努めた。そして愛国心のような人格的なものに重点をおく従来の研究に対し、制度、社会、経済のような非人格的 (インパーソナル) なものの研究に重点をおくとともに、歴史的現象は単一の原因からおこるのでなく、政治、経済、宗教等複数の原因からおこるとする。例えば革命運動は政府と個人、本国と植民地といった対立するもの双方からの作用によつて、諸対立の両極をめぐる社会的、経済的、地理的、宗教的諸力の複合性 (コンプレクシテイ) から生ずるとするのである。このような立場は今日なお当然のことながら多くの歴史家の支持をえている。この派の中でも影響力の大きかつたピアア・Bean についていえば、彼は大煙草商人の出身であり、後イギリス植民地政策の研究に終生をささげたのであるが、アメリカよりもむしろイギリス側の史料の検討に重点をおき、いわば英帝国の見地に立つて立論するにいたり、結論として「当時英帝国はフランス・スペイン・ポルトガル等とならんで植民地帝国を形成していたのであるが、これらの中でイギリスの植民地政策はもつともすぐれて居り、まさに最良の母国 (ベスト・マザー・カンントリー) であつた。そして独立した十三植民地はイギリス大植民地帝国の中の一小単位にすぎず、その独立は同一家族圏 (ファミリー・サークル) 内での内乱であつた」というのである。このようにしてイギリスはかつての「暴君」から、きわめて植民地と互恵的であつた「最良の母国」にかわつてしまつた訳であるが、後者のような見方が現在も合衆国の社会に一般的なもので、学界でも支持せられ、学校における歴史教育の基礎をなしている。このような立場になつて、古い伝統的な独立革命観を回顧してみると、それが多分に偏狭なものであつたといわざるをえない。

いうまでもなく、十七世紀におけるいわゆる第一義政策であり、植民地は原則的には本國にとつて原料供給地にして且製品の世界という關係にあり、時にはイギリス本國から各種植民地に罪人や浮浪者が送られ、本國の不良、不用の品がおしつけられたこともなかつたわけではない。しかし決してそれだけではなかつた。すでに北米十三植民地、西インド諸島、セント・ローレンス河谷を領有し、その領土は更にアジア・アメリカにまたがっている第一次英帝國の政策はフランス・スペイン・ポルトガルをはるかにしのいで、綿密に「互惠的」に計画されていたもので、貿易路線（トレード・ライン）にそつて、有無相通じ、本國、植民地共榮の道がもくろまれていたのである。そしてこれからの路線はしばしば三角貿易の形をとつていたのであるが大西洋を中心とするその最も重要なラインは、英本國↓アフリカ↓西インドというものであつて、商船隊は織物その他の商品を積んで本國をたち、これをアフリカの植民地で売つて、黒人奴隷を買入れ、これを西インドに送つて代りに砂糖・香料・煙草等を本國にはこんだのである。この三角貿易による利益は「空想的」なものであつたといわれ、三航海に成功すれば、生涯の富有な生活が保証された。いずれにしても、新大陸方面における植民地では多量に砂糖を産する西インド諸島が極めて重要であつて、その前には北米の十三植民地の存在ははるかに影がうすかつたのである。たしかに十三植民地も木材・毛皮・乾魚・馬・ラム酒・香料・藍・煙草・舟等を生産して居り、十三植民地を中心とする三角貿易も行われ、また帝國內の經濟のバランス

をとる為に本國と十三植民地との間に相当量の貿易が行われたことも事実であるが、注目すべきことは、總括的にいつて英帝國の植民地政策が互惠的であつたということと、新大陸方面の植民地の中では西インドが特に重要であつて、北米の十三植民地はきわめて小さな存在でしかなかつたということである。ここからは合衆國の獨立を本國の壓制とこれに対する反撥とみる解釈はうまれてこない。むしろイギリス本國がその重商主義政策の成功に安んじて、あまりにも長くその政策をかえなかつたその間に、十三植民地、特に北部植民地（Northern Colonies）があまりにも急速に經濟的発展をなしたとげたということが獨立革命をみちびく基本的な原因であつたのである。本國の重商主義政策に対抗して、あるいは本國と競争しない工業を發達させ、あるいは植民地中心の三角貿易によつて經濟的悪条件を克服しつあつた十三植民地は、やがて自給の爲の鉄製品・帽子・織物等の生産をおこなうようになり、英帝國家族圏外のフランス領、スペイン領西インドと密貿易も盛に行つた。そして特に北部植民地の發展はめざましく、七年戦争の後のイギリスが戦後の財政たてなおしの爲に、船舶保護条令、砂糖条令、印紙条令等の諸条令をやつぎばやに發布して、密貿易をとりしまり、もしくは植民地に課税しようとしたときには、すでに十三植民地は社会的、政治的、經濟的に事實上の獨立、又は獨立可能の状態にあつたので、七年戦争後のこれらの本國による植民地政策はむしろ獨立を促進する結果となつたのである。この時代に至つてもなお本國とセント・ローレンス河谷、西インドとの間には充分提携の余地があつた点から考えても、獨立革命の真因が諸条令の發布その他による壓制ではなくして、十三植民地の飛躍的な政治的、社会的、經濟

的な發展そのものにあることは明らかで、これらの諸々の要因が複合的な作用をなして、獨立に導いたものとするのが吾々の立場であるが、これらの歴史的作因の中で經濟的なものもつとも基本的であつたとみたいのである。

（六頁より破）

音楽と魔法

ヤスバースの実存と理性に関する交通

ラッセルの認識論哲學の研究

ジャン・ジャック・ルソーについて

ハイデッガーの存在論について

カントの実践哲學

精神薄弱兒と義務教育

現代日本の大衆思想運動と宗教の二問題

スピノザの神について

仏文學科

サルトルの哲學的思惟に於ける文學的導入につて Le Mur, La Nausee の周辺

ジイド「背徳者」について

獨文學科

ウィルヘルム・シュミットボンの作品と人間性について

史學科

支那碑碣の形式について

農地改革

日蓮の思想について

近代に於ける大阪の農村生活

薩摩藩の弾圧にあえいだわが農民（奄美大島）

乾

松造

谷田 吉弘

寺島 勝城

西村 嘉郎

野藤 正則

原山 末勝

平松 啓一郎

藤田 快榮

山村 秀忠

山本 恵子

江潮 弘

箕山喜久雄

中村 佳行

白石 幹雄

石伏 芳一

# 学内報

## 入学式挙行

関西大学学部昭和三十五年度入学式(新制になってから第十三回目)は、四月十一日(月)、一部は法学部、文学部が午前十時より、経済学部、商学部が午後一時より千里山第一学舎講堂で、二部は法、経、文、商各学部とも午後五時より天六学舎講堂において、また工学部は翌十二日(火)午前十時より天六学舎講堂においてそれぞれ挙行、いずれも矢口学長の訓辭に続いて新入学生の宣誓が行われた。

なお、学校法人関西大学の設置する関係学校の入学式もそれぞれ左の通り挙行された。

四月十二日 午後一時 大学院

四月 八日 午前八時半 第一高等学校

四月 七日 午前八時半 第一中学校

## 琉球大学と交歓

文学部横田健一教授、大学院経済研究科尾崎義之君、経済学部三年伊波盛伸君三名は沖縄の学術調査、琉球大学との交歓、校友会沖縄支部との連絡等の目的を以て春休みに同地へ赴いた。伊波君は三月十二日先発隊として出発、本島及び八重山各地を調査した。横田、尾崎両氏は四月一日神戸を出発、四日那覇着。五日

## 松原、杉原、吉永、高橋

### 各教授に博士号授与

経済学部松原藤由、杉原四郎、文学部吉永登、高橋盛孝各教授は、かねてそれぞれ所属の本学部に論文を提出して博士号を請求していたが、各教授会でパスし三月十五日付(文部省)を以て、松原、杉原両教授に経済学博士号、吉永、高橋両教授に文学博士号がそれぞれ授与された。なお、博士号授与式は、三月二十六日千里山大学ホールで行われ、本学役員、各学部長、各主査出席の下に学長より四博士に学位記が授与された。

松原、杉原、吉永、高橋各博士の略歴及び論文題名左の通りである。



松原博士

昭和十四年関大経商学部経済学科卒、大学院にて経済政策論研究、同十八年関大講師、助教、教授、専門部学生部長、学部学生部長代理、同三十一年在外学術研究員として一ケ年間英米に留学、同三十二年教養部長代理、大学院兼務、同三十三年、関大経済政治研究所研究員、経済学部長代理、評議員、理事

(授与学位) 経済学博士  
(論文題名) 経済政策の転回と産業構造



杉原博士

昭和十六年京都帝国大学経済学部卒、同十七年京大助手、同二十一年兵庫県立医科大学予科講師、同二十二年同学教授、同二十一年近畿南部地区学校集団教員適格審査に合格、同二十三年本学助教、同二十五年教授、同三十年経済学部長代理、同三十二年本学在外学術研究員、同三十四年教養部長代理。

(授与学位) 経済学博士  
(論文題名) ミルとマルクス——現代経済思想の二大源流——に関する比較研究



吉永博士

昭和二年関大専門部文学科卒、同年専門学校入学者検定試験合格、同六年大阪外語附設第五臨教国漢科

卒、同五年文部省中等教員国語科検定合格、同六年大阪府立豊中学校勤務、同八年文部省高等教員国語科検定合格、同九年兵庫県立伊丹中学校、同十七年関大講師、同十八年専門講師、同年教授、同二十二年専門部主事、同次長、同三十四年学内協議会協議員、教養部長

(授与学位) 文学博士  
(論文題名) 万葉集の研究「一部飛鳥、藤原朝篇、二部人麻呂、憶良篇」



高橋博士

大正十二年東京帝国大学文学部支那哲学科卒、同年師範学校中学校高等女学校漢文教員免許状授与、同十五年高等女学校高等科漢文科教員免許状授与、同十三年兵庫県立神戸第一高等女学校高等科講師、同十五年静岡高等学校講師、昭和二年大阪府立農業補習学校教員養成所教授、同年関大講師、同十三年教授、同十八年生徒主事、同二十四年専門部長、同二十三年(新制)教授、専門部教授、同二十五年短大教授、大学院兼務、同三十一年在外視察研究員

(授与学位) 文学博士  
(論文題名) 東亜民俗「A・B篇」

琉球大学を訪問、矢口学長のメツセージならびに本学各種出版物図書類を琉球大里源秀学長に贈呈した。六日より八日は伊是名島調査、九日は今帰仁城、運天港方面調査の後、那覇市料亭松の下における校友会沖縄支部歓迎会に出席、十日校友平尾氏提供の自動車にて鉢嶺校友会支部長等案内により糸満方面より南部戦跡、中城方面見学した。十一日より横田、伊波両氏は空路八重山に行き石垣島各地調査、十六日宮古島へ立寄り見学の後、那覇へ寄着、その間尾崎君は那覇にて金融経済関係調査を行った。十七日より首里方面調査、十八日横田教授は琉球放送より対談を放送、十九日一行正午琉大よりの招宴に出席後、琉大にて横田教授は「最近における国史研究の動向」の題目で講演、二十四日神戸に帰着した。尚大より持参の関大学生生活、七十年記念式典等の映画フィルムは沖繩テレビより放送し、また琉米文化会館の斡旋により、八重山方面において二回上映した。

### アメリカ国会図書館より年報寄贈

本学と図書交換を行っているアメリカ国会図書館 (Library of Congress) より

この程左記同図書館年報を寄贈して来た。なお本年報は図書館関係者垂涎のものである。

Annual Report of The Librarian of Congress for the Fiscal Year ending June 30, 1959. Washington, 1960.



### 佐藤選手(一高)

四連勝  
フィギュア・スケート

本学一高佐藤信夫選手は、今冬スコーパーレーの冬季オリンピックに出場、目覚ましい成績を挙げたことは既報の通りであるが、帰朝後も練習に励み、去る三月二十七日から四日間東京後楽園アイスバ

ルスで行われた第二十八回全日本フィギュア・スケート選手権大会でも、終始着実な技術でリードし、スクール最終では二位の西倉(立教)選手を33・6点ひきはなして四年連続優勝を遂げた。

(最終順位)

- ①佐藤信夫(関大一) 1181.33 (スクール691.5、フリー489.83)
- ②西倉(立教) 115.61 (スクール657.9、フリー457.71)
- ③杉田(明大OB) 1111.49 (スクール634.8、フリー476.69)
- ④佐々木(同大)
- ⑤道家(明大OB)
- ⑥小泉(明大)

### 34年度全国優勝祝賀会

昭和三十四年度中に全国優勝の栄冠をかち得た拳法、馬術、空手、剣道各部の健斗を表彰しようと、関西大学体育OB会主催で、去る三月二十六日午後四時から千里山大学ホールで盛大な祝賀会が催された。

矢野体育OB会会長をはじめ、矢口学長、小野学生部長ら教授、OB多数出席、各氏より祝辞、あいさつがあり、矢野会長からベナントが各部へおくりられた。

### 校友会との懇談会

(七頁より続く)

校友会では新しく入学する学生から終身会費の予納を受けつける問題などについて、校友会と話しあうために懇談会を

ひらいた。

席上、校友会側は終身会費の予納についてのいろいろの問題を話して了解と協力をもとめたが、校友会の基本的には反対だという態度は変らなかつた。



校友会と校友会との懇談会

しかし度重なる懇談の結果、あくまでも任意であることを明らかにするならば校友会は黙認するとの見解をとつたため、校友会はその線に沿って予納を受け付けることになった。

その結果、新入生の入学手続期間および入学式に受け付け、約千名の新入生が終身会費を予納した。

昭和三十四年度卒業論文題名 (4)

— 文 学 部 —

- 現在社会と英語教育 桐田 守倫  
 「大地」に現れた生命力の問題パール S バックの人間像 久保 和雄  
 「マクベスの魔女についての一考察」 小山 彦磨  
 「海と老人」におけるヘミングウェイの文体と人間性の研究 小山 充俊  
 「マクベスと現代人」 齊田 陽一  
 主題ヘミングウェイ論副題篇四篇にあつたる人生観 1. The Sun Also Rises. 2. Farewell to Arms 3. For Whom the Bell Tolls 4. The Old Man and The Sea  
 坂岡 信行  
 定冠詞の研究 造田 広明  
 サマセットモームの「人間の絆」について 田又 俊夫  
 「人間の絆」を通してのサマセット・モームの人生観について 土井 敏幸  
 Ernest Hemingway の文体について 中村 勤  
 On the Tempo-Conscious in the Tragedy—Study of Contrast between "Hamlet" and "Macbeth" R. P. ウォーレン 「天使の群」についての一考察 新美 芳久  
 ハムレットについて 西田 弘義  
 グレアム・グリーン 服部 幸雄

- 「アンクル・トムの小屋」について 山中 昌一  
 作品研究 武器よさらば 山崎 真靖  
 芥川竜之介の俳句について一考察 行政 敏朗  
 国木田独歩について一考察 安藤 健次  
 一茶俳諧についての一考察 赤羽 明義  
 夏目漱石 安福 雄次  
 広津柳浪論 市野 貞子  
 西鶴の町人物に就いて 今和泉 繁  
 井伏鱒二論 内堀 潔  
 川端康成論—雪国を中心として— 小川 修  
 大滝 京子  
 徳富蘆花「不如帰」の大衆性 釜永 満  
 西鶴「好色五人女」考 川村 達造  
 島木健作論 北岡 演  
 漱石作品「それから」の意義と価値 笹山 利春  
 徳富芦花論 齊藤 得三  
 志賀直哉の一考察、前半を特に中心にして 田淵 喜昭  
 「金色夜叉」と「不如帰」の比較論評 竹内 福隆  
 説経節正本に於ける山椒太夫物語の變化と時代背景 坪井 滋明  
 若山牧水と其の短歌に就いて 柘植 善治  
 志賀文学私考 並田 昭平  
 蕉風論 中村 早司  
 横光利一論 中杉 清登  
 一責善教育の立場にたつて—作品「破戒」論 永坂 耿  
 谷崎潤一郎と大阪について 西浦 康雄  
 夏目漱石作坊つちやんについて 丹羽 宏次  
 西鶴「好色一代男」について 西村 博文  
 芥川竜之介論 能木 利雄  
 日本文芸の精神史的考察 主として平安期以後 原田 敏夫  
 人間芭蕉について 東出 祐一  
 「松川裁判」へのみち—広津和郎の抵抗の姿勢について— 広岡 八郎  
 齊藤茂吉の短歌 藤本 信雄  
 寺田寅彦と随筆 福井 睦雄  
 日本文学が琉球文学に与えた影響 槇産 明  
 奥の細道の一考察—それに関係して芭蕉の事も少しのべたい— 前田与三九  
 「太宰治」の人間性について 松森 孝基  
 有島武郎 宮川 徳夫  
 好色一代男について 森本 昌栄  
 田山花袋論 森 弘育  
 芥川竜之介 山本 健  
 田山花袋の「田舎教師」について 柳 昌中  
 世間胸算用について 安井康太郎  
 伊藤整の小説「氾濫」について 横山 正夫  
 敬語考 吉成 孝之  
 上田秋成論 雨月物語と春雨物語 吉見 進  
 徳富芦花「黒潮」の考察 米田 昌雄  
 哲学 ラッセルの教育論を中心とした性格教育における愛について 荒田 祥嗣  
 存在と無 大東庄次郎  
 カントの実践理性批判における道徳律と自由 木村 光雄 (三頁)



校

友

校友会の動き 三月

二日 学友会との懇談会  
五日 学友会との懇談会  
七日 組織部会

十二日 学友会利益代表との懇談会

二十日 組織部会

十九日 生野支部総会

二十日 徳島支部総会

二十一日 学友会との懇談会

二十三日 広報部会

二十七日 友粋会総会

二十八日 部長会

二十八日 組織部会

三十日 大阪市役所支部総会

組織部会

組織部では昭和三十五年度新生から終身会費の予納をうける問題について具体策を検討したり、また今春卒業する新卒業生の校友会入会勸奨などについて協議するため、三月七日、十二日、二十八日に部会を開いた。

新生から予納を受付けることは校友会と話しあつた結果、趣旨を新生に通知したうえで前述の通り受付けた。

また新卒業生の方は校友会入会を勸奨するため、PR紙を発行配布するなどして運動し、個々に勸奨状を送つたうえ卒業式当日千里山学舎で例年通り受け付けを行った。

席上、三十四年度中に各地で実施した講演会がいずれも好評であつたため新年度も九州、四国、北陸方面で数回開く計画を検討した。

生野支部総会

生野支部では三月十九日午後七時から天王寺区真法院町の「ひし亭」で総会を開催。

ちようど大学の卒業式と同じ日であつたため、学長や大学当局の出席者がなかつたが、校友会から金本組織副部長が出席した。出席者は少なく約二十名であつたが予定通り進められ、役員改選では、もう一期留任して支部の強加をはかつてほしいという要望が強く、支部長馬場次郎氏の重任が決つた。金本組織副部長が校友会と支部活動の現況について説明、本部名簿の作成、会費の徴集など支部当面の問題について意見を交換して閉会した。

友粋会総会

友粋会では三月二十七日午前十一時から大阪郵政会館別館で総会をひらいた。これは日本メリヤス検査協会の安田会員が東京へ転任するため、その送別もかねて開かれたもので会長の森田文一郎氏の司会でなごやかに進められ、出席者一同、楽しいひとときを送つた。

またこの席上行なわれた役員改選で会長に再び森田文一郎氏を選出、幹事として梅井、西沢、小谷、宮野の各氏が選ばれた。

なお支部事務所は大阪市東北京橋三ノ五・森田文一郎氏方におかれる。

部長会

校友会では昭和三十五年度収支予算案作成について協議するため、三月二十八日正午から堂ビル・清交社で部長会を開催。

席上、昭和三十四年度の収支中間報告を検討、その結果、三十五年度予算はあくまでも実質本位で組む方針をきめ、この席上でた意見を調整して財務部で原案を作成し、四月中旬開催の常議員会に上程されることになつた。

大阪市役所支部総会

大阪市役所支部ではさる三月三十日午後六時から大阪戎橋「キリン会館」で総会を開催。

大学から神宅理事長、矢口学長が、校友会から榎本副会長、寺西組織副部長が出席、会員百余名が出席して開かれ、はじめに村上支部長から支部活動の経過を報告、ついで副支部長が一名欠員になつているため補欠選挙を行なうことにな

り、荒堀茂氏(南区役所市民課長)が選任された。

そのあと市長代理として出席の橋本助役が「大阪市在職の関大卒業生が七百名をこえているが、大阪市の中核として活躍して下さつており感謝している」とあいさつ、続いて神宅理事長、矢口学長からあいさつと大学現況についての説明があり、榎本副会長も校友会を代表して祝辞をおこつた。

識事のあと、大阪市議・寺西武氏の音頭で乾杯して開宴し、八時半無事に盛大な総会の幕を閉じた。(五頁)

昭和三十五年度版

校友名簿

B5八百頁  
本文四万名  
価 七百元

三十一年度版より内容の充実完備をはかつた校友名簿がいよいよ五月末に最新明確を期して発行部数に制限がありますので早目に予約御申込み下さい。御申込みは

直接・天六学舎内 校友課  
振替・大阪 一二八七五番  
大阪市大淀区長柄中通二  
関 西 大 学

關西大學法制史学会 共編  
關西大學經濟學會經濟史研究室

# 大阪周辺の村落史料

第四輯 五人組帳 フランス綴函入 一八三頁  
四〇〇円

五人組帳の研究は既に多く試みられてはいるが、同じ地方のものをまとめ、同じ地方にあつても年代によつて異なることの研究にまで及んでいない。収録のものは大阪周辺の五人組帳のみをまとめた特色あるものとした。

- 第一輯 庄屋留書 既刊
- 第二輯 耕肥、拝借銀、頼母子 既刊
- 第三輯 證文集、村役人 既刊

刊行 關西大學  
刊行取扱 關西大學出版部

なお、既刊各輯は貴重稀覯文献の活字版として各方面の注目を受け、古書市販価格が頒布価格の約二倍となつてはいる現状です。在庫数も残り少なくなつていますから御入用の方は直接当部へ御注文下さい。

關西大學出版部

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十五年四月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報 第三三八号

四月号

編集兼 久井忠雄 発行所

大阪市淀川区長柄中通二丁目  
關西大學出版部

電話 堀川 25 二〇七二番  
振替 大阪 二六七二二番

印刷所  
株式会社 ナニワ印刷所  
電話(35) 七二七一

關西大學新聞学会編

井上先生古稀記念

## 新聞學論集

昭和三十五年一月 A5判 一六三頁

内容

- アメリカ十八世紀新聞の編集意識について……………内野茂樹
- 西ドイツ新聞の特性についての考察……………加藤三之雄
- 本山彦一の新聞商品思想……………金戸嘉七
- 象徴操作の過程……………田宮武
- テレビジョン報道の潜在可能性……………中井駿二
- 社会科学の統合と社会心理学の立場—その序論—……………広田君美
- エスペランティストとしての二葉亭四迷……………藤間常太郎
- 動機の社会的理論……………吉田民人

關西大學經濟政治研究所編

## 日米安保条約と圧力団体

第三部研究班 研究双書 第四冊

昭和三十五年三月十日 A5判 一〇三頁

内容

- 日米安保条約と圧力団体……………堀 堅士